

パリと大阪

神戸芸術工科大学 学長
松村 秀一
Shuichi Matsumura

天神祭りの夜

久しぶりに関西に戻ってきたという事で、今年度上半期は、旧知の関西人による「お帰りなさい会」があったり、新たな仕事仲間による歓迎会があったり、「神戸ってどんなところ？」という事で東京方面の知合いが訪ねてきたり。有難いことになかなか賑やかな日々が続いた。

やはり建設業界に友人や知人が多いので、関西でも「松村の連載、楽しみに読んでるで」と声をかけて下さる方もちらほら。そんな中の一入、土木分野、殊に道路の分野で頑張ってきた在阪の旧友S君が、行き

つけの店で乾杯しようということ、他の友人数名とで「てっさ」（東京では「ふぐ刺し」を食べに行つた。こつてり大阪人のS君だから、場所は当然のように道頓堀。インバウンドの方々を掻き分け掻き分け漸く店に辿り着いた。「なんか混んでるし、わざわざしてゐるなあ？」

「今日から天神祭りやからなあ。そこから賑やかやで。」
天神祭りでは、子供や町衆の乗り込んだ手漕ぎの「どんどこ船」が何艘も道頓堀川に繰り出す。私が出会ったのは、それを見に来た観光客であり、その「どんどこ」音の賑やかさだったのだ。
「花火は明日やけどな。」

セーヌ川

その二日後だったと思うが、パリでオリンピックが開催された。仕事柄、下手をすると、大阪の中心部よりも足繁く通つたかもしれない花の都パリの、コンコルド広場やグラン・パレ、トロカデロ広場やエッフェル塔といった誰もが知るようないくつもの場所で、様々な競技が行われた今回のオリンピックは、「まちに開かれた」と形容すれば良いのか「まちが開かれた」と形容すれば良いのかわからないが、とにかく専用の競技場の中に閉じ込められていないという意味で、画期的なオリンピックだった。

とりわけパリという空間を思う存分贅沢に使つた開会式の演出は目を見張るものだった。

巨大な気球によつて夜空に浮かんだ聖火のリングや、エッフェル塔から歌い上げたセーヌ・ディオンの「愛の讃歌」も感動的だったが、何と言つてもセーヌ川を下る幾艘もの船に乗つてまちの人々に手を振つた各国選手団の入場(?)式は圧巻だった。

セーヌ川沿いでは、他にも爆発音とともにオステルリツ橋から立ち上つたフランス国旗トリコロールの煙、河岸に現れたレディー・ガガ等、人々を興奮させる仕掛けがいくつも展開されたが、オリンピックの主役たちが大小様々な船で登場する演出は、当日の雨などものともしい、華麗な力技だった。

溝口健二の空間

このセーヌ川の開会式を見て、私がすぐに思い出したのは、日本映画界の巨匠溝口健二の戦前の代表作「残菊物語」(一九三九年)のラス



溝口健二の「残菊物語」のラストシーンを飾る「船乗り込み」。その現在の道頓堀の様子(提供:朝日新聞社)

トシーンだった。

物語の内容については、ここでの主題ではないので割愛するが、溝口健二の代名詞とも言われる長回し撮影による表現法「ワンシーン・ワンショット」が確立されたのがこの作品においてだと言われており、私が思い出したラストシーンも、巨匠溝口のリアリズムを徹底的に追求した演出によって、臨場感溢れる独特の映像体験を生み出すものになっている。そして、そのラストシー

ンに映し出されたのが、何を隠そう道頓堀川の「船乗り込み」だったのだ。

天神祭りのどんどこ船とも似ているが、「船乗り込み」は、東京や京都の歌舞伎役者が大阪での公演に来た際に、役者陣が幾艘もの船に乗り込み、大阪のまちの人々に挨拶する入場(?)式なのである。

江戸時代から続くというこの行事は、顔見世するのが役者かアスリートかの違いだけで、パリ・オリ

ンピックのセーヌ川でのメイン・イベントの先行例と言つて良いものなのだ。溝口は、そのイベントにおいて川と人とまちが一つの空間を形作る様子を、大胆かつ艶やかに描き切っている。

あの開会式を溝口健二が撮つたらどういふ映像になったのか、思わず想像してみたくなる。

そして、万博

思いがけず、祭りと川という話題で、パリと大阪が結び付いた。

日本人にとつての世界的なイベントとしては、パリのオリンピック、パラリンピックの次は、大阪の万博ということになるだろう。万博の方は、藤本壮介さんが設計したリングをはじめ、何かと建物の建設のことばかりが話題になりがちだが、大事なのは祭りの中身。この祭りを通して、大阪というまちがどう世界の人々に開かれたものになるのか、楽しみに待ちたいと思う。